

ノート

学生相談室報告 (10)

瀬 瀬 康 兵

Report from the Counseling Room (No. 10)

Kohei KOKETSU

What does young generation think about themselves ?

本室に於いて学生相談室を担当し、この報告を記すのも今年で丁度10回目となった。この10年間、学生達と接してきた中で幾分気掛りとなった事は、彼等現代の学生達が曾てない程に自分自身の在り方や生き方に就いて、能く考えなくなってきたり、或いは考えられなくなってきたりしているのではないかと、言う事である。実際、若い世代の無気力、無関心等が社会的な問題として新聞等に取上げられている。こうした事も又、自分自身に就いてあまり考えなくなった、若い世代の表わす態度の一つであると言えるのかも知れない。

具体的に彼等と話をしてみると、自分自身の在り方、生き方と言った事を決定する際、実に安易な処で済まそうとしているのか、或いは其処で妥協せざるを得ないのか、兎も角極めて皮相的な視点でしか自分自身を眺めようとする学生が多い様に思われる。例えば、或る学生に大学へ入った理由を尋ねてみたら、次の様な答が返ってきた。

- (1) 中学の頃から、両親も自分も大学へは進学すると決めていたから。
- (2) 高校での成績が、この大学に適合していたから。
- (3) 就職の事を考えて、工科大へ進もうと思ったから。
- (4) 大学生生活を過ごしてみたかったから。

以上の様な返答は、この学生に限らず現代の学生にほぼ共通して聞く事が出来るものである様に思われる。

先づ(1)に就いては、如何に理解する事が出来るであろうか。恐らく彼の両親は、現代の社会事情を観て、我が子が大学へは行って欲しいと、彼が幼い頃から望んでいたであろう。それが彼の中学時代の頃から彼自身にとって表面化し、両親と共に自分も大学への進学を未だ漠然とであるが、決めていたと言う事であろう。然し、経験不足の彼に自分自身のこの決定の全責任を、負わせる訳にはいかない。

(2)に就いてはどうだろうか。この理由は彼が既に高校生生活の大半を終え、その時点で受験大学を決定する一

つの要因となった単なる結果としての事実を示している。高校での学業成績と言うもの自体は、彼自身に或る程度責任を問う事が出来るものであるかも知れないが、是から受験大学が決定したと言う事は、彼自身にとっては自分が真剣に考えてこの大学を選択したのである、と言う意図を薄らいだものになっている様である。寧ろ、彼は(1)と同じ次元でこの決定に関する自分の意志の責任を、見ようとし位置付けようとしている処が窺われた。

更に(3)に就いて見てみよう。この理由に関する限り、幾らか将来を見越した自分自身に就いての考えが示される。然し彼の場合、この理由を上記した言葉以上に深く考えてはいなかった。一体どの様な職業を、工科大卒業後に考えているのか、との問いに対して、「別に」、との答えが返ってきたのである。結局彼は、一般に文科系よりも工科大の方が就職に有利な面があると言われるのを聞いて、工科大へ入ったと言うのである。確かに就職先の具体例を挙げる事は、未だその時機に直面していない学生にとって出来ない事かも知れない。然し一生の問題となり得る職業と言うものに対しても、彼は自分自身に課せていこうとする様な責任ある意志を示したとは、決して思われないのである。

最後に(4)に示された理由が、或る意味でこの学生の返答の凡てを貫ぬいた真意であるのではないかと、思われる。現代の学生達が送っている生活振りは、周知の如くである。多くの楽しみに満ちた生活が、そこにあるようである。それを又、肯定し増長させるかの様な、テレビ番組や雑誌の記事がある。彼もそうした情報を得て、それを欲したのであろう。果せるかな彼は現在、その楽しみに満ちた生活を送っているらしい。アルバイトと両親からの援助とで得た自家用車に乗り、夏は海へ冬はスキーへ等々。大学での単位さえ一応取得出来れば、自分の責任は果しているとして、自分自身の現在を正当化する。この学生は、人生を楽しく生きなければ意味がないと言っていた。

この学生の例の様に、多くの現代の学生達は自分自身の在り方や人生と言うものを、極めて皮相的な処で観、其処から決定してしまうようである。或る一面から見ると、彼等の欲求水準は低い処に固定され、一時的な欲求、或いは物理的な欲求が、彼等自身を支配しているかの様に思われる。自分自身に対する真に意志的な欲求を、彼等はおもたないのか或いはもつ事が出来ないでいるのか。それに就いての分析をこの報告に於いて為す事は出来ないが、現在の結果としてそれをもたない彼等は、そうした自分自身の意志に関わる責任を意識する事さえ出来ないようである。こうした多くの現代の学生は、自分自身を自分自身で生きるという事を、忘却しているのであろうか、それとも放棄しているのであろうか。こうした事は彼等自身にとって、実に意味のない事であると思われるのであるが、もっと自分自身に就いて能く観、能く考えて欲しいと彼等に望んでおきたい。

古代ギリシアの時代から、人間は自分自身を能く見つめようとしていたのであるから。

「汝自身を知れ (γνώθι σαυτον)」

付記；過去1年間に学生相談室で取扱った件数を相談内容別に集計した下表をご参照いただきたい。

相談内容別取扱件数
(昭和61年1月17日～昭和62年1月17日)

相 談 内 容	件数	%
1. 学業全般 (留年を含む)	96	42%
2. 学生生活	86	38%
3. 対人関係 (恋愛を含む)	16	7%
4. 精神衛生	14	6%
5. 進路問題 (専攻・就職など)	11	5%
6. 健康問題	5	2%
計	228	100%

(受理 昭和62年1月25日)